

▲▼▲第53回クリエイティブサロン(2018年 1月20日)開催報告▲▼▲

第1部講演会：「想 power」

講師：アダム・フルフォード氏 (フルフォード・エンタープライズ 代表)



日本人のDNAとも言える「相手を想う心」は人類にとって大事な価値観。仙崖禅師の布袋の画には「お月様いくつ十三七つ」と歌っている二人の心が月に寄り添っている。歌という音も、音の下に心が付くと「意」になり、意味を持つ。さらに心偏が付くと「憶」となり記憶になる。文化・文明まで心が造るということで「一切唯心造」という言葉がある。理想的な「想い」は真相と真心からつくられる。周りの特性を最大限に活かすのが想powerだ。10年前から参加してきたユニバーサルキャンプin八丈島は衝撃的だ。障害者といわゆる健常者が一同に集まってテントで生活する。テーマは参加型社会づくり。目の不自由な人も飲んで酔っぱらう。彼がふらついてテントを探している場合、手伝うべきか、見守るべきか。その瞬間の判断、「一期一会」の判断だ。高齢化が進む地方でも、このような判断の練習が必要だと考えるようになった。その後、美の里づくりコンクールの審査員の機会を与えられ、人脈が広がった。そして、山形県飯豊町中津川地区という300人の集落活性化の依頼が来て、新企画を始めた。キーワードは「オープンマインド」。その場その場で話題を作る一期一会だ。

「遠慮のない」外国人と「相手を想う」日本人が参加するこの行動的なイベントを「NowHow」と呼んでいる(また、NowHowの第一歩として、人の心と体を調和させる「歩くこと」を活かす「Walkshop」を明治神宮で始めた)。

先生のように教えるとなると一方的になる。NowHowではむしろ参加者一人一人に異なる経験・専門性がある。それにアクセスできる環境を作り、参加者を「仮村民」と呼び、大いに「よそ者提案」をさせている。私の役割は彼らを反応させる「触媒」だ。集落の特徴をよく知っている年配の方々の知恵こそ伝承すべき世界遺産。将来は国内外にある心の故郷が繋がることを目指している。

(記事：田村新吾)

第2部講演会：「臓器再生への道」

講師：中村真人氏 (富山大学生命工学科教授)



臨床医から人工心臓、再生医工学の研究の道に進んできたが、その中で様々な矛盾的課題に思い悩む中、解決の道を考えて進んできた。その概要を講演させていただいた。「創造・クリエイト」の識者先生諸氏からのご指導ご鞭撻をいただけると幸いである。

臓器不全の患者に対する最後の砦となる治療法が臓器移植であるが、臓器不足は世界で深刻化し、解決の糸口すらない現状がある。また、臓器は、誰かが死なねば得られない。患者を助ける一方で誰かの死や犠牲を願う望む矛盾的問題もある。筆者が臨床医から人工心臓の研究開発の道に進んだのは、これら移植医療の問題を克服するには、科学で臓器を作り出すしかないと考えたからである。医学と工学が融合する人工心臓の研究開発現場で活動する中で、「必要なものは作る」という考え方、手作業からCAD/CAM/CAE (Computer aided Designing, Manufacturing, Engineering)主体のデジタル時代への変化、そして、研究から実用への道の困難と課題を学んだ。現在、人工心臓は、臨床での切磋琢磨と患者治療の実践の時代に入っている。

その一方、機械式人工臓器の限界を克服するため、次に目指すべきは生きた人工臓器と考え、細胞培養を手習い、再生医工学の手技や課題を学んだ。そこでそれらの課題を克服すべく、世界に先駆け生きた細胞で立体物を作る3Dバイオプリンターを開発し、組織や臓器を作る新手法を提唱した。この研究はバイオプリンティングと呼ばれるようになったが、その本質は、『機械で臓器を作れるか?』という前例なき挑戦である。手作業での細胞培養主流の再生医療へ、機械の手、CAD/CAM/CAEのデジタル製作、Additive Manufacturing (付加的製造法)を導入した。世界的な3Dプリンターの大流行を追い風に、今や3Dプリンターで組織を作る手法が世界の主流となった。「機械で臓器を作る時代」の到来はもはや夢ではない。

さらに筆者らは、これらの経験を活かして、次の研究に着手した。「臓器再生」の新しい治療概念を創出し導入することで、世界の臓器不全治療がまた一段進歩すると確信する。

(記事：中村真人)